

國境の夜

秋田雨雀

キャスト

大野三四郎 (開墾者)

覆面者 (主人の影)

アンリシカ (アイヌ)

大野ゆき (大野の妻)

みどり (長女)

二郎 (次男)

五郎 (三男)

其他旅行者、其妻及び幼児

場所——北海道、十勝平原の一部。

舞臺左手は、雪に蓋われた原野の一部。遠く雪に包まれた國境の連山が見える。幾條かの樑道が國境の方へ光つてひかれている。右手は大野家農園家屋の内部、正面及び左手に小さなガラス窓がついている。正面の左手に表に出る戸がついている。右手に戸があつて、他の室へ通ずる、室の構造は粗末であるが、頑丈そうである。正面及び左手のガラス窓からは太い氷柱が劔の様に垂れている。

室の中央には大きな圍爐裡があつて、火が盛んに燃えて、鍵にかつた大きな鐵瓶には、湯が盛んに沸騰している。正面の窓に近くテーブルと椅子があり、それに近く大きなランプが吊さられている。テーブルの上には帳簿が三四冊載つている。右手の戸の傍に小形の金庫が置かれている。すべて第一期の北海道成功者の生活を想い出させる。

第一節

幕の上つた瞬間に、主人を除く他の四人は、圍爐裡を圍んで葛湯を飲んでいる。主人はテーブルに向つて書き物をしている。年にしては若々しい顔の主人の妻は、三人の子供達に

葛湯を拵えてやつている。

娘 (葛湯のコップを持ったまま) お母さん、外はひどい嵐ですね！ それに雪も降つてる

と見えて、ガラス戸にあんなに雪が……

母 (葛湯を拵えながら一寸顔を上げて) まあ！ この分じやまた網走線が不通になるかも知れないね。私は二十年も其餘も北海道にいるけれども、今年のような雪は一度も見ることがないよ。

娘 でも、お父さん昨日歸つて来てよかつたのね。今夜のような晩だつたらどんなに心配するでしょうね。

母 ああ、ほんとにいいことをしたね。二郎にあげようか？ 五郎さんはもうお止めにするんですよ。

三男 うむ、あたいにもう一杯！

母 然うか、それぢや、二郎さん、五郎に半分だけおあげ。

次男 己おいらしいやだ……五郎にも拵えてやればいいんだよ。お母さん。

母 いやな子だね、お前はもう一杯飲んでしまつたんじゃないか、五郎には半分しきややらないんだからお前のを半分だけやつたらいいじゃないの、いい子だから。

次男 己らしいやだ、姉さんのを分けてやればいいんだ。

娘

(笑いながら) いやな子! それじゃ五郎には姉さんのをあげようね。さあ、コップをお出し、そうら、これでいいだろう?

三男は黙ってコップを受取って甘そうに啜る。

母

(次男に新しく出来た葛湯を渡す) さあ、これを飲んだら、みんな温和しく寝るんですよ。(主人に) あなたも一杯あがりませんか? 葛湯を飲むと身體が温まりますよ。こんな晩は早く寝てしまおうじやありませんか。

主人

(ティブルに對つたまま) うむ、ひどい風だな。私は昨日歸つていいことをした。子供等は早く寝かした方がいい。私はもう少し書き物がある。湯をどんどん沸かして置いて呉れ。

母

書き物は明日の朝になすつたつて、いいじやありませんか、こんな寒い晩になさらずにたつて。

主人

然うしてはいられないんだ。お天氣になつたら、明日にもまた札幌へ行つて來なければならぬ。

娘

お父さん、また道廳へいらつしやるの? この間の用がまだ濟まないんですか?

主人

ああ、まだ濟まない。然し、もう直きだ。何して相手は無教育な奴等ばかりだから話にな

らんのだ。

母

でも、餘り面倒なことには關係なさらぬ方が好うございますよ。相手が解らない人間ほど怖いじやありませんか？

娘

お母さん、ほんとうよ、あの人達、停車場で私に逢うと、いつでも、高い聲で惡口なんか言うんですもの、私ほんとにいやになつてしまふわ！

主人

（怒氣を含んで）あいつ等は、そんなことでもしなければ私に對抗が出来ないんだ……何しろ裁判には敗けているし、登記ももう済んでいるのだから、亂暴でもするより他に仕様がななのだ。

母

でも、そんな人間を相手にいつまでもごたごたするのはほんとうにいやじやありませんか？ 錢金には代えられませんからね。私もこんないやな思いをして、いつまでもこんな寒いところにいるのはいやですよ。人に怨みを受けるのは一郎やみどりの出世の妨げにもなるじやありませんか。

主人

（辯解らしく）お前達には解らないんだ。今に何も彼も解決するのだ。この事件が解決さえすれば、私もこの農園を管理人に任せて、札幌か東京で暮すつもりだ。燃そうなれば、みどりにも十分勉強させるし、一郎とも毎日逢えるのだ。

娘

お父さんは、いつでもそんなことばかり仰しやつて、一度も實行したことがないんだもの、私お父さんを信用しないわ。

主人 (笑いながら) 信用出来なかつたら信用しなくてもいいさ。今にお父さんが何んなことをするか見ているがいい。お父さんは、お前達の生れない前から此方へ来て、それから

というものは寝る眼も寝ずに働いて来たのだ。お父さんの此方へ来た時は、この邊は一面の大森林で、山手に少しばかりアイヌの部落があつたきりだ。お父さんと、お父さんと一緒に来た人達が、土地を拂下げて森を切拂つてその後、豆を蒔いたのだ。一番最初に豆の収穫のあつた時の喜びは今でも忘れられない。あの土佐の百姓達の来たのはそれからずつと後の事さ。その頃、お父さん達は、馬鈴薯と豆だけを食べて暮したもんだ。その頃の事を考えるとまるで夢のようだ。

次男 (突然に) お父さん、其頃熊がいた？

主人 ああ、いたとも、家の牧場の入口のポプラのあるところに、大きな榆の樹があつたが、お父さんは、あの邊で熊に逢つたことがある。いい鹽梅にお父さんはあのアンリシカと一緒にいたので、アンリシカはその熊と取組みあつて、マキリで殺してしまつた。それからアンリシカはお父さんの家へ来るようになったのだ。

次男 お父さん、アンリシカは幾つになるの？

主人 さあ、幾つになるか、お父さんにも解らない。アイヌは自分の年を忘れてしまうものだから。

母 ほんとにあのアイヌはいつでも同じような顔をしていますね。私が初めてここへ来た時

も、やつぱりあんなような髯むしやな顔をしていましたね。

娘 然う、お母さん？ アイヌは一寸見ると怖そうだけれども、みんな溫和しいものね。

主人 然うだ。アイヌ人は内地人よりもずっと溫和しい。そしてみんな恩を知っている。(ある

連想から)あの土佐人のような恩知らずは一人もいない。お父さんは土佐人の村のこと
で何れだけ骨を折つてやつたか知れない。それをみんな忘れてしまつて、お父さんの開
墾した土地を自分達のものだと言い張るのだ。(辯解らしく)それや、土佐人の拂下げた
土地もあつたにはあつたが、途中でやりきれないで、全部引拂つて内地へ歸つたのだ。

そこでお父さんは正式の手續きを踏んで、莫大の資金を下してその土地を開墾したのだ。
開墾が出来て収穫のある頃になつたらまた歸つて来て、お父さんの土地を自分達のもの
だと言ひ張るのだ。幾ら道理を分けて聞かしてやつても納得しないのだ。お父さんは若
い時から他人に恩を賣らない代りには、他人の世話にもならないで暮して來たのだ。そ
れはお父さんの哲學で、同時にお父さんの道德なのだ。つまりお父さんは他人の生活に
立入らない代りには、他人にも、お父さんの生活に一步も立入らせないのだ。

三男 (突然)お母さん、眠い!

主人 寝かしておやり、二郎ももう眠いだらう。早く寝かしておやり。

母 え。さあ、みんな寝よう。二郎も一緒にお休み。

次男 お母さんまだ寝ないの？

母

お母さんも寝るよ。さあ、寝かしてあげよう。

主人

よく温まつて寝ろよ。風邪を引かせないようにした方がいい。みんなもう一遍火に當つて寝ろ。

二人の子供は両手を開いて圍爐裡にあたる。子供等の顔は赤く輝いて、満足と幸福を表わしている。家族の間に温い沈黙がつづく。

主人

さあ、二人とも此方へ来い。頬片ほつぺたが温まつたかな。(主人は、鬚の濃い顔を、二人の子供等の額に觸れて見る) おお、よしよし、これじゃ朝まで温かいぞ。さあ、寝ろ。

二人の子供は主人に對つてお辭儀をする。

主人

おやすみ！ 温かにして寝かしておやり。

二人は母につれられて、右手の戸から隣室に行く。主人は再びテーブルに對つて仕事を始める。娘は爐に木をついだり、鐵瓶の湯を見たりしている。

娘 お父さん、葛湯を一杯あげましょうか？

主人 うむ、一杯もらおうか？ お父さんののは極く濃くしてお呉れ、今年の葛はよく出来たから、兄さんのところへも送つてやろうね。

娘 (葛湯を造りながら) お、父さん、兄さんのところからお音信たよりがあつて？

主人 先月の初めに一回あつた。來年の春になつたら、お前をよこして呉れと言つて來た。

娘 (喜よろこばしげに) 然う、ほんとう、お父さん！ お父さん、來年はきつと私を出してくださるでしょう。

主人 ああ、いいとも、お父さんも來年の夏までには東京へ出るつまりだ。お父さんはこれから東京へ出てほんとうに働くつもりだ。

娘 然う、お父さんまだ働くの？

主人 働くとも、人間は死ぬまで働くべきものだ。お父さんも最初はこんなところで働くつもりじゃなかつたのだ。お父さんも一郎のように東京で學問をするのもりだつた。然しお父さんには一郎のように金をつづけて呉れる人がなかつた。お父さんは子供の頃、人間というものは正直に働きさえすれば、幸福が一人手に來るものだとはばかり信じていた。然し正直はいつでも金のあるものために敗ける。金のあるものは學問や力を買うことが出来る。だが、正直は何も買うことが出来ない。そこでお父さんは金のないお前達のお祖父さんを怨めしく思つた。そしてお父さん東京を飛び出したのだ。もしお父さんが、

ここで働かなかつたら、一郎やお前に學問をさせることも出来なかつたし、お前達とこ
うして暮すことも出来なかつたのだ。

娘 (葛湯を主人のテーブルのところへ持つて行つてやる)ですけれども、お父さん、金と
いうものは、そんなに尊いものでしょうか？

主人 (葛湯を啜る)それやお父さんだつて、唯が金を儲けるのが目的で働いて來たのじやな
い、お父さんはお父さんを苦しめた世間に復讐するために働いて來たのだ。

娘 然しお父さん、そんな生活はお父さんにとつて、ほんとうに楽しい生活でしたか？ お
父さんのような生活は、苦しいやな生活じやありませんか？

主人 それは勿論、楽しい生活じやなかつたかも知れない、然しお父さんにとつては仕方のな
い生活だつたのだ。第一楽しいか、楽しくないか、お父さんにも考える餘裕もなかつた
のだから。

娘 それじやつまらないわ。人間は何んなに苦しんでいても、自分の生活を考えて生きて行
けさえすればやつぱり幸福じやないでしょうか？

主人 それはお前達から考えることで、お父さんにとつては斯うして生きて來るより仕方がな
かつたんだ。お前にはまだ解らないことだ。

娘 然し、お父さん、お父さんに意味のある生活でも、私達につまらない生活であることも
あるでしょう。

主人 (真面目に) それはあるかも知れない。然し私は今までお前達の幸福を考えないで生きて来たことは一度だつてないつもりだ。私は私の生活のためにお前達を苦しめたことは一度もないつもりだ。お前達の幸福のためにお父さんは働いて来たのだ。

この瞬間に遠く犬の吠える聲がする。主人と娘は暫く沈黙のままている。

母 (戸を静かに開けて入る) 大變犬が吠えていますね。この寒さは何うです! みいさんも、もうお休み。(主人に) あなたも、お休みになつたらいかがです?

主人 (帳簿を閉じる) ああ、そうしよう。手がかじかんで仕様がな。 (立つて爐の傍に来る。坐つて両手を火の上に翳す) 未だ吹いているようだな。いつまで吹くつもりだろう? やつぱり犬が吠えてる。戸締りをさしましょう。みいさんもよくあつてお休み。

主人 私は表の方を締めるからお前は裏の方を締めて呉れ。

主人は表の戸を開けて見る。吹雪が顔を打つので、顔をしかめながら強く戸を閉めて鍵をかう。

ひどい吹雪だ! 明日は道がなくなつてしまふかも知れない。さあ、早く締めて寝よう。

母は主人から鍵を受取つて右手の戸から入る。娘は室の整理を始める。コップを棚の上に載せたりする。主人は火箸で火を叩く。火花が散る。

娘 (神経質に) お父さん、誰か来たんじゃないですか？ 人の足音のような。

主人 (耳を澄して) そんなことないだろう。こんな吹雪の夜誰が歩いてるもんかね？

娘 いえ、お父さん、ほんとうよ……何だか人の呼吸づかいもするようよ。ほら話聲がする
じやありませんか？

主人 (無頓着に) こんな晩に旅をするなんて、随分亂暴な人間もあつたものだ……さあよく
あたつておいで。

主人は再びテーブルに向う。

第二節

やがて二人の旅行者が全身雪に包まれ左手から現われる。夫婦者らしく女の方は四五歳の子供を背負つている。女は家の壁に觸ると同時に、そのまま力なく壁にもたれ蹲しゃがんでしま

う。

男 (戸を叩く) もしもし、一寸お頼み申します……

娘 (鋭敏に) お父さん、誰か戸を叩いていますよ……開けてあげましょうか？

主人 (本能的に) 黙っておいで！

男 (戸を叩く) もしもし一寸お頼み申します……

娘 大變疲れているようですよ。もし入れてやらなかつたら、凍え死んでしまうかも知れませんが……ね、お父さん、元氣のない聲じゃありませんか……お父さん、開けてやりましょうよ。

男 (戸を叩く) もしもし一寸お頼み申します……一寸でよろしいのですから……

母 (戸を開けて入る) あなた、誰か戸を叩いてるじゃありませんか……何とか言ってるよ……
うですよ……

主人 (以前よりもつと冷靜に) こんな晩に出歩いでる奴があるものか……じつとしておいで。開けなかつたら何處かへ行くだろう。

母 それじゃあんまり可哀想です……開けてやりましょうよ。

主人 餘計なことをするものじゃない！ 何な人間だか知れたもんじゃない。いいからお前達は寝ておいで。

女

（ひよろひよると立上り、壁に顔をびつたりつけて震えながら）もしもし、ここを一寸開けてくださいませんか……吹雪で難澁しているものです……つかれて、お腹がすいて……それに子供が、子供が……

母

（無意識的に壁の方へ寄つて、女の言葉を聴く）つかれて、お腹がすいているんですつて……

娘

お母さん、子供をつれていらっしゃるんでしょうか？ さあ、開けてあげましょうよ。

主人

（次第に病的な冷酷さを増す）餘計なことをするもんじやない！ お前達は寝てしまえ、聲をたてないようしておいで！

男

私達は何んにも怪しいものじゃありません……今朝帯廣から来たのですが、途中で雪に降られて死にそうになつてゐるんです……二里ばかり先方からお宅の燈火ばかりをあてにして来たものです……他に一軒も家がないのですから……ここを開けてくださらなければ凍えて死んでしまふばかりです……

母

……二里ばかり先方から家の燈火をあてにして来たんですつて。

主人

聲を立てるなというのに！

男

（戸を指で觸りながら）何うか何んとか言つてくださいますか……あなた方の一言で私達親子三人の生命が助るんですから……ここからあなた方の立つているところがよく見えるんです……奥さま、何うかその明るいところへ一寸でもいいから入れて下さいま

せんか……お嬢さん、どうかお父さんをお願いして、ここを開けていただくようにしてくださいませんか……

主人は本能的にランプを消す。

女

（男の言葉に勇氣を得て、立上りながら）ほんの一寸でようございますから……この子供のを雪を解かしてやるだけでいいですから……この子はもう呼吸を引きとりそうになっているのです……何うせ死ぬものにしても温い火の傍で死なせたいと思います……その温い圍爐裡の傍へ一寸でも置いてくだされば、そのまま眼を落してもあきらめがつき……ます。

娘

お父さん……お父さん……お父さんはなぜ燈火を消してしまつたんです……

主人は沈黙をつづける。

母

あなた、何うしたのです……この人達はあなたの敵なのでしょうか？ 平生のあなたとは何うしても思えません……あなたはあの人達の言うことが聞えないんですか……

主人は身動きもしない。

男

あなた方のお話しなさる聲だけははつきり聞えています……ああ懐かしい聲です……私達は一日人間の聲を聞かなかつたのです……その聲を聞かなくても私達の身體が温まります……もうこの鍵を外してくださいませんか？

二人の男女は戸の方へ寄つて力を併せて戸を押している。

家の中で娘の泣聲がする。主人は石のように黙している。

男

（指で戸を引掻く）やつぱり鍵がかかっている……何うしてここを開けてくださらないのでしよう……ここをただ一尺ほど開けてくださりさへすればいいのです……私達は明日の朝、皆様のお眠覚めにならない内にここを立つてしまうのです……少しもご迷惑をおかけしないつもりです……

女

私共を入れてくださるのがそんなに厄介でございましたら、この子供だけでよろしうございませう……私共はこの軒下で眠つてもよろしいのです……何うか、この子供の顔を見てやつてください……

家の中は暗く冷い、そして娘のすすり泣のほか何の答えもない。

仕方がありません、ここを立つて行きましょう……ここにこうしている間にはよつぽど歩けるでしょう……さあ、行きましょう……

男

(力のない聲で) ああ、仕方がない、また歩くことにしよう……(急に思い返して) 然しもう一遍、お願いして見よう、あんまり残念だ……あんなに温い火が燃えているんだ……もしもしあんまり未練らしくて、自分に自分が腹が立つような氣持もいたしますが、この子供に死なれてしまえば、私共は死んだも同様です……明日から私達は何が楽しみです、生きて行きましょう……何うかここを開けて、この子を温めてやってください……もし、いよいよここを開けてくださらないなら其譚を一寸聞かしてください……そうしてください……私達は喜んで歸つて行きましょう……何とかたつた一言言つてください……

女

何うか奥さま、奥さまにもお子さんがおありのようです……子供の可愛いことはよく御存じの筈です……奥さま、何うか一言何とか仰有つてください……さあ、これがお別れです……

室の中で娘が戸の方へ突進する氣配がする、然し主人はそれを制止する。

誰も何とも言わない。

男

（全く絶望して）じゃ、仕方ありません……この子供のために元氣を出して歩くことに
しましょう。

女

一寸でも軒下へ置いていただいた御禮を申し上げます……もし私共親子の死骸がお眼にと
まるようなことでもありましたら、犬に喰われないようなところへ埋めて置いてくださ
います……

男

（歩きながら）馬鹿なことを言うもんじやない……そんなことは何んのたしになるもの
か……さあ、行こう……

二人は殆んど雪の中に埋もれるような姿で、家の後の方に行く。
家の中の人は長い間沈黙をつづけている。

母

（ランプに火を点ずる）とうとう行つてしまった！

主人は二度と笑うことの出来ないほどの緊縮した表情をしてテーブルに腰をかけている。
娘は戸に近く両手を眼にあてて立っている。

三人とも顔を合わせる事が出来ない。
外は益々荒れている。

主人

(嚴格に) みんな寢てしまえ。私はこれから仕事をしなければならぬ。お前達はいつでも他人の生活のために苦しめられている。私は他人の生活を妨げない代りには、他人のために自分の生活を妨げられるのもいやだ。

娘

(突然) お父さん！　これがお父さんの哲學なの？　(半ば泣きながら) つまらない、ほんとにつまらない哲學です……獣でももつといい哲學を持っています……お父さんの哲學は石ころの哲學です……

母

(娘の傍へ行く) これ、お前はお父さんに何を言うのです？　お前は何うかしたの？

主人

(強いて笑いながら) この子は少し昂奮しているようだ。氣を落ちつけさせて寢かしてやらなくちやいけない。

母

みいさん、さあ、寢よう。お前は今晚何うかしているよ。氣を落ちつけなくちやいけませんよ。さあ、お母さんと一緒に寢ようね。

母は娘を賺しながら右手の戸から去る。主人は二人の去つた後、爐に木をついだり、鐵瓶に水をさしたりして再びテーブルに對う。

アンリシカ (戸の外から) ニシバ、ニシバ寝たか？

主人 (仕事をしながら) アンリシカ？

アンリシカ う、う、そうだてや。ニシバ寝たか？

主人 今寝るところだ。お前は今時分何處へ行つて來たのだ？

アンリシカ 餘り寒いて、己ら内おいから温まるべいと思つて。ニシバ、寒い晩でないか？ アイヌは

お神酒みきないと死んでしまつてや。

主人 お前幾ら飲むつもりだ？ 先刻飲んで行つたばかりじゃないか？ 朝になつてから、ま

た飲んだ方がいいだろう？

アンリシカ そんなでないてや……たつた一杯呉れるよ……ニシバ可哀想でないか、今シャモが二人死んでいたてや、ニシバ知つてるか？

主人 (無意識的に立上る) 死んだ？ 誰が何處で？

アンリシカ あの橋のところ、ここから見えてや……シャモのメノコ子供を背負つていたてや。不憫でないか？ 何してここさ入らないかさ？ シャモ賢しくても、やつぱり馬鹿だてや！

主人 (無言のまま戸を開いて) さあ、お入り、アンリシカ、それはほんとうか？

アンリシカ (アツシの上に雪が一寸ほども積つている。手に徳利を持つている) アイヌは偽を言

わないてや……ニシバ、御神酒一杯呉れろ！

主人 （無言のままアイヌの顔を見ている）死んだのはいつの話だ。

アンリシカ 今のことだてや、たつた今の話だてや……ニシバ、御神酒一杯呉れろ！

主人は無言のまま、アイヌから徳利を受け取り、爐傍の樽から酒を注いでやる。アイヌはそれを嬉しそうに眺めている。

アンリシカ （幾度もお辭儀をしながら）ニシバ、有難いてや、有難いてや……ニシバ、おやすみ、

また朝に来るてや。

主人 もう行くのか？ さようなら、おやすみ！

主人はアイヌの去つた後、不安そうに戸を締める。鍵をかい、それから爐の火をいけ、ランプを消して右手に去る。舞臺全く暗くなる。

第三節

舞臺が再び明るくなつた時、覆面した一人の男が、鑛山などに用いるガスランプのような

ものを携えて室の真中に立っている。覆面者の眼が異様に光っている。

主人は右の戸を開いて室に入つて来る。二人は短い間沈黙のまま相対している。

主人 (鋭い聲で) お前は誰だ？

覆面者 (太い力ある聲で) お前は誰だ？

主人 己はこの家の主人だ。お前は一體誰の許可受をけて己の家へ入つて来たのだ？

覆面者 誰の許可も受けはしない、己は己の衝動で入つて来たのだ。

主人 一體何しに己の家へ入つて来たのだ。

覆面者 何しに入つて来たか、己にもよく解らないのだ。然し己のこれからやる仕事で大抵見當がつくだろう。

主人 (怒りを無理に壓えて) 他人の家へ無斷で入つて来て、妙な事をいう奴だ：一體お前は
何だ？

覆面者 己は盗賊だ！

主人 (怖れと怒りの入り亂れた語調で) 盗賊？……よし、盗賊が己の家へ何しに来たのだ？

覆面者 盗賊は何しに他人の家へ入つて来るか、大抵想像が付きそうなものだ。盗賊に入られたら、盗賊に入られた時の覺悟をするがいい。

主人 お前は一體何が欲しいんだ？

覆面者 己は己にないものは何んでも欲しい。自分になくて、他人の持つているものほど餘計に欲しいのだ。それはお前の方がよつほど好く知つてる筈だ！

主人 妙なことをいう奴だ。己は盜賊なぞを怖れる人間じゃない。己は若い時から身體を鍛えて來ている。盜賊の一人や二人は何んとも思つていない。

覆面者 なるほど、いい度胸だ。それ位の度胸がなければ盜賊は出來ない筈だ。

主人 (怒りを含んだ聲で) 盜賊？ 己はいつ盜賊をした？

覆面者 そんなことは自分に聞いて見るがいい。夜が更ける、仕事が晚くなる。問答は後廻しにしよう。(語調を變える) さあ、お前の持つている有りつたけの金を出せ！ 一文でも隠すと承知しないぞ。

主人 お前は己を金持だと思つていいのか？ 己にも幾らかの金はあるが、それは皆な己の事業に使う金で銀行に預けてあるのだ。己は己の事業で百人以上の人間を食へさせて行かなければならない。折角だが手元には金が一文もない。

覆面者 そんなことで偽される己じゃない。己が盜賊に入る時はちゃんと目星をつけて置くのだ。
主人 幾ら何んと言われても、ないものは仕方がない。見ればお前は多少教育のある人間らしいが、覆面して夜夜中、人の家へ押入り強盜に入らないでも、幾らでも話の仕様もあるうというもんじやないか？

覆面者 生意氣なことを言うな！ 話の仕様があるようなら、盜賊には入らない。己はお前に説

法されるような盗賊じゃない。お前はこの前の火曜日に銀行預金を二千圓引出してある筈だ。それから昨日お前は札幌から郵便貯金を三百圓持つて来た筈だ。さあその金を一文も残さず己に渡して呉れ。

主人

（覆面者の顔を凝視して）なるほど、然ういわれると、然うに違いはない。然しあの金は己の使う金じゃない、この月末に肥料會社へ拂わなければならぬ金だ。あれを持つて行かれては己は困つてしまう。何うかそれだけは免して呉れ。

覆面者

そんなら改めて金を引出して来たらしいじゃないか、けちなことを言う奴だ。

主人

（力なく）けちなことを言うんじゃない、己は正直なことを言つてるのだ。

覆面者

然しそんなことは己の知つたことじゃない。そんなことを一々聞いていた日には盗賊は出来やしない。ぐずぐず言わないで、二千三百圓の金を綺麗にここへ出すがいい。

主人

今も言う通り、それでは己も困つてしまうのだ。その代り、其内幾らかはお前にあげよう。何うかそれで温和しく歸つて呉れ。

覆面者

己はお前に金を借りに来たんじゃない、盗賊に來たのだ。さあ、渡さなければこれだぞ！
例えお前達のようなものでも、金より生命の尊いことは知つてるだろう。さあ、綺麗さっぱりと渡すがいい！

覆面者は主人の眼の前にピストルを突きつける、主人の顔は次第に蒼白くなる。

何うだ？　これでも人間の生命より金が大事か？　お前の返事一つでこの指が動くんだぞ、この指を御覧！

主人　（顔をピストルから背けて）お前に然ういわれると一言もない。己は若い時から色々な幸な生活をして来た人間だ、そしてこの四五年になつて、ようよう人間らしい氣持になつたところだ。何うか己を殺すのだけは止して呉れ。

覆面者　そんなら、金を渡すか？

主人　さあ！

覆面者　（ピストルを延べて）渡さなければこれだぞ！

主人　（涙を流して）よし、己も男だ。未練らしいことはしない。金は確かにこの金庫に入つてゐる。ピストルを延べるのはよして呉れ。己も年をとつたら弱くなつた。決して抵抗しないから其處で待つて呉れ。

覆面者　よし、それならピストルを向けるのだけはよしてやろう。さあ早く出せ。

主人は手をぶるぶる震わせながら金庫を開いて金を引き出す。

主人　さあ、これを全部お前に呉れてやる。妻や子供が知つたら何んなに悲しむか知れない。

餘り騒がないように温和しく歸つて呉れ。

覆面者

それは己の勝手だ。己はお前のところへ金を貰いに來たのじゃない、取りに來たのだ。

主人

それはよく解つてゐる。兎に角己はこんなことを家族の者に知らせたくないのだ。己は今まで他人のために自分の生活を掻き亂されなくて暮して來た。それは己のたつた一つの誇りであつた。

覆面者

ふむ。お前は自分の生活を掻き亂されなかったために、何十人、何百人の生活を掻き亂してゐるか知れない。そんなことはお前だつて知つてる筈だ。

主人

己は他人の生活を掻き亂したことはない……己は他人の生活を掻き亂すことを大きな罪惡だと思つてゐる。

覆面者

それは當前の話だ。そんなことは、お前が犬猫同様に使つてゐる作男の方がよつぽどよく知つてゐる、そしてちゃんと實行してゐる。お前の知つてるのは理窟だけだ、そしてお前の生活はいつでも其反對だ。

主人

（自分を忘れて）何んだと、お前は己の哲學をひっくり返そうというのだな？ 己の哲學は理窟から生れて來たものじゃない。己の哲學は五十年間の實行から生れて來たのだ。己の血と汗から生れて來たものだ。お前のような盜賊に破られるようなものじゃない。

覆面者

破られるか破られないか、見てゐるがいい。（ポケットから一筋の麻繩を出して主人に示す）ここに一筋の繩がある、己は今この繩をお前に渡すから、己の言う通りにするの

だ。もし己の言う通りにしなければ、己はすぐお前を射殺してしまう。さあ、この繩を取れ！

主人 (躊躇しながら) 繩を持って何うするのだ！

覆面者 兎に角繩を持てばいいのだ、そして己の言う通りにするんだ。

主人 (澁々繩を受取る) いやな氣持の繩だ……いやなべたべたしたものがついてる。

覆面者 血が着いているんだ。

主人 (繩を投げ出す) 血？

覆面者 (ピストルを向ける) 繩を持たないか！

主人 (震えながら、再び繩を手に持つ) 早く命令して呉れ……時間のかかるほど己は苦しむばかりだ。

覆面者 蟲のいいことを言うな。盗人猛々しいとはお前のような奴のことを言うのだ。

主人 何方が盗賊だ？

覆面者 何方が盗賊だか、考えて見るがいい。

主人 己は氣狂になりそうだ。お前は己に何んの怨みがあつてこんなことをするのだ？ 己は今までこんな侮辱を受けたことがない。一體己は何うすればいいのだ。

覆面者 騒ぐな！ さあ、繩でお前の子供達の首を締めるのだ。(右手の戸を指示す) あすこでお前の子供達はいいい心持で眠っている。眠っている内に諦めるのだけは免してやる。盗賊

にも情のあることを知るがいい。

主人 (がたがた震えて来る) 恥しい話だが、己はもう元気がなくなつてしまつた。己は今立

つてゐることも出来ないほどだ。そんな無理なことは言わないで、溫和しく歸つて呉れ。

覆面者 お前はがたがた震えている。お前の顔をお前に見せてやりたい……さあ、何んの彼のと

時が経つ、早く其繩でお前の子供達の首を絞めろ!

主人 何うか、それだけは免して呉れ……己はこの一本の繩を持つことさえようようのことな

のだ……何うして己の子供の首が締められるものか?

覆面者 いつまで、ぐづぐづしているのだ。さあ、早くしないか?

主人 何うかそれだけは免して呉れ。己は今まで他人に頭を下げて免しを請うたことのない人

間だ……もし必要ならば……己は己の持つてゐるものは何んでもお前にやる……子供等

を締め殺すなんてことはてんで考えもされないことだ……どうか、それだけは免して呉

れ!

覆面者 然うだろう。殺せないのは當前だ。それじゃ、お前はこの燈火を持つて戸口に立つてい

ろ。もし一步でも動くも承知しないぞ!

主人 お前は己の子供を殺すつもりか?……己は何うしてそれを見ていられよう……どうか免

して呉れ!

覆面者 さあ、燈火を持たないか? 此方へ来い! 歩かないと射殺すぞ? しつかり持て、そ

んな顔をして己を見るな！ この戸の蔭にお前の妻とお前の子供が眠っているのだ。温い臥床の中で眠りながら死ぬ子供は何れだけ幸福か知れない。

主人は夢遊病者のように覆面者のピストルに導かれて、右手の戸の前に立つ。主人は殆ど知覺を失つた人のようにぼんやり立っている。

覆面者は靜かに戸を開いて室の中に入る。戸を開いたままである。やがて、子供等の悲鳴を上げる聲と床をうつ音がする。

娘の聲 ……あれい……お父さん……早く來て……人殺し……あ、あ、……あ——あ、あ……

母の聲と子供の聲が入亂れて聞える。物を打つ音。壓迫する音。物の摺合う音。器物の破れる音。

主人 待て！ お父さんは今直ぐに行く！

覆面者の聲 そこを一步でも動くと承知しないぞ！

主人 （燈火を投げ捨てる）撃つなら撃て！

主人は燈火を投げ捨てて隣室に突進する。

ピストルの音。

主人の呻く聲。

舞臺は全く暗い。

長い間。

第四節

舞臺が少し明るくなつた時、表の戸を打つ音がする。

正面と左手のガラス戸から朝日が射し込む。

アンリシカ ニシバ、いつまで寝てるんだべい？ ニシバの家さお日様晩く照らすだか？

主人 (荒々しく戸を開く、そして怖そうに周囲を見廻す) やつぱり、もとのまだ…… (戸に手をかけたまま隣室の方を見廻す) やつぱり、みんな生きている……ああ何んて夜だつ
たんだ！

アンリシカ (戸を叩く) ニシバ、何してるんだべ？ ここ開けて呉れろや。ニシバの家お日様笑
つてるべいてや。

主人 (戸を開いてやる。日光が明るく差し込む) アンリシカ! よく来て呉れた。(アンリシ

カの手を堅く握る)

アンリシカ (主人の顔を凝視して) ニシバ。今日何うしたか? 青い顔をしてるてや。

主人 アンリシカ、火があるか見て呉れ。

アンリシカ (爐の火を掻き廻しながら) 火うんとあるてや。

主人 然うか、火をどつさり燃して呉れ。

アンリシカは圍爐裡に木をつぐ。やがて火が燃え上る。

主人 アンリシカ、よく光にあたつて、己と一緒に行って呉れないか?

アンリシカ ニシバ、來處さ行くんだべいや?

主人 己と一緒に昨夜死人のあつたところへ行くんだ。あの人達は新しい雪の下になつて死んでるだらう……よく温つて呉れ。

アンリシカ ニシバ、今日何うかしたか? 『シャモの心は二つある』つてほんとだてや。アイヌの心はいつでも一つだ。駄目だてや。駄目だてや!

主人 (アイヌの毛深い手を堅く握る) アンリシカ、お前は幸福な人間だ! お前こそほんとの人間なのだ!

主人はアイヌをだきかかえるようにしていつまでも離さない。

—幕—

底本 未来劇場 第4第4国境の夜（秋田雨雀）

出版者 未来社

出版年月日 1953